

## 音楽の諸要素へ耳を傾け、それを聴き取る音楽活動の試み

—グループによるオンデマンドな鑑賞と和声があるキャラクターの感受—

新山王 政 和 (愛知教育大学 創造科学系音楽教育講座)

菅 野 裕 子 (焼津市立豊田中学校)

中 野 直 幸 (焼津市立和田中学校, 元静岡大学附属島田中学校)

## Activity of the music to find out the musical elements

— the report that focused on harmony, and some reports of the appreciation class —

Masakazu SHINZANOU (Department of Music Education, Aichi University of Education)

Hiroko SUGANO (Yaizu-Toyoda Junior High school)

Naoyuki NAKANO (Yaizu-Wada Junior High school)

**要約** 新しい学習指導要領では、表現分野と鑑賞分野を横断して音楽の諸要素を扱うように求めている。よって今後は、生徒に気付かせたい・聴き取らせたい・感じ取らせたい・教えたい・身に付けさせたいと考える音楽の諸要素について、その成長をめざして授業を組み立てていくことになる。そこで本報告では、自ら音楽の諸要素へ向き合わせる事が難しいと言われる鑑賞分野で試みられた、劇場型の一過性・一斉鑑賞ではなくグループ単位でオンデマンドな方法によって音楽の諸要素から楽曲の雰囲気を感じ取らせた実践と、和声があるキャラクターを聴き取らせた実践を紹介している。同時に筆者は音楽科授業とは一過性の楽しさではなく「次に繋がる成長の楽しみ」を体感させる場であると考えていることから、音楽科授業に於ける活動の意義についても改めて考察した。

**Keywords** : 音楽の諸要素, 鑑賞, オンデマンド, 和声

### 1. 研究の背景と筆者のスタンス

新しい学習指導要領(中学校)では「音色, リズム, 速度, 旋律, テクスチャ(和声を含む音と音の関わり), 強弱, 形式, 構成(反復・変化・対照など)」の音楽の諸要素や要素同士の関連を知覚させ、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を、表現(歌唱・器楽・創作)と鑑賞分野の活動を横断して感受させるように求めている。よって今後は、活動を目指した授業ではなく、音楽の諸要素に関する成長をめざして授業を組み立てていくことが求められるであろう。具体的には、生徒に気付かせたい・聴き取らせたい・感じ取らせたい・教えたい・身に付けさせたいと考える音楽の諸要素を核に据えた単元を構成することで、自ずとその評価も明確になり、例えば「伴奏にのって歌えた」という抽象的な評価も「伴奏のテンポや強弱の変化に合わせて歌えた」のように具体的な根拠と理由を伴った評価へ変わり得る。この音楽の諸要素に関連付けて音楽的な根拠と理由を付して評価することは、とても重要なことである。もし生徒が日々の授業において活動や演奏に対して教師から音楽的な根拠と理由を伴った評価を絶えず耳にしていれば、指導要領が求める「感じ取ったことを言葉で表現する」や「根拠を持って批評する」ことも自ずと可能になる。つまり教師は「客観的に演奏を聴きそれを理由や根拠を示して評する方法」の手本を見せておかなければならない。

ある研修会で話題になったのだが、筆者は全ての音楽活動を貫く基盤は「聴く」ことだと考えている(×聞く, ○聴く)。音楽は聴くことから始まり、聴くことで終わる。CD等のプロの演奏や仲間の演奏を聴くだけではなく、聴きながら活動したり演奏しながら他者の音へ耳を傾けたりする。そこで聴き取ったことを、鑑賞の場合では前頭葉で思考や音楽的嗜好へ結び付け、演奏の場合では視床下部レベルで運動(動作, 呼吸)と連携させる。その際に脳は活性化することが知られている。これを活用して「表現=演奏, 鑑賞=聴く」のように独立させた活動だけでなく、「演奏しながら音の○○に気を付けて聴く, 演奏しているつもりで△△を聴き取る」のように、音楽の諸要素を触媒として演奏と鑑賞を融合する活動を探るべきであろう。

そして「頑張らないと見つけられない, ちょっと頑張れば見つけられる。いっぱい頑張ればいろいろなことが見つかる」とハードルを少しずつ高くしスモールステップに設定することで成就感や達成感を伴って鑑賞活動を反復させ、この反復によって体験が経験へ高められた時、音楽の諸要素に関する知識や技術が裏付けを伴ったより確かなものとして身に付く。この反復に向かわせる意欲・関心の維持や動機付けには、例えば合唱や合奏でハモった時の美しさやタテとヨコが揃った時の爽快感など、私達がこれまでどんな音楽現象へどのように心を動かされてきたのかを体感させ、音楽に関して質的に意味のある楽しみ方とその仕組み

や楽しむ方法を理解させる工夫が必要になる。

よって本報告では, 音楽の諸要素を聴き取り音楽の質的な意味を伴った楽しみ方を体感させることをめざした鑑賞分野の実践を紹介した上で, 音楽科授業で行う活動の意義について再考察した。

## 2. グループ単位でオンデマンドな方法によって音楽の諸要素から楽曲の雰囲気を感じ取らせた実践

焼津市立豊田中学校の菅野教諭によって行われた鑑賞を紹介する。菅野教諭による実践は, 拙著(新山王・菅野2008)でも報告しているとおり, 劇場型の一過性・一斉鑑賞ではなく, グループに分かれ聴取者の要求に添って楽曲を聴くオンデマンドのようなスタイルを採っている。この方法では, メンバーの要求で楽曲の一部分を取り出して繰り返し聴いたり, 聴き取ったことを話し合ったりすることで, 音楽を言葉に置き換えて比喩的に捉え, 音楽の諸要素を拠り所にして楽曲の雰囲気を感じ取ることが可能になっている。

### 2.1 音楽の諸要素を拠り所として「魔王」を聴き取らせた実践

#### 2.1.1 授業の概要

①授業名: 「魔王の攻略」, グループに分かれて聴き取る実践 (中学校1年生対象)

②教材: 鑑賞曲「魔王」, ワークシート (生徒が書き込み, 教師が朱を入れて活動を刺激する)

③授業者が考えた手立て

I: クラスで一斉鑑賞させるのではなく少人数で繰り返し鑑賞をさせると, ふだん埋もれがちな生徒も他の生徒から共感して貰え, 一人ひとりが充実した意見の交換ができるかもしれない。

II: 聴き取って議論したことをワークシートへ書き込ませ, 教師も生徒のワークシートへ積極的に書き込むことで, 音楽の諸要素を基にしてイメージを膨らませることができるかもしれない。

#### 2.1.2 楽曲を聴いて生徒が聴き取ったこと

学習メモから生徒が感じ取ったことを整理する。この中から, 生徒が情緒的な聴き方だけでなく音楽の諸要素に沿った聴き方をしようとしていたことと, 聴き取ったことを自分の言葉で表現しようとしていたこと, この2点を読み取って欲しい。

① [声 (音) の高低から感じたこと] 高い音は怖さを, 低い音は冷静さを出している。父は子どもの気持ちを落ち着かせるため全体的に声が低い, 上がり下がりも少ない。語り手の最後は事実だけを伝えるから声が低い。「おとうさん!」の部分が半音ずつ高くなっていく=恐怖心の高まり。子どもは一言ずつ高くなってく, 3回目と4回目の差が激しい。4回目は最初か

ら最後まで高い→子どもが焦る。

② [強弱から感じたこと] 子どもの声量がアップしていく。魔王のメロディーは小さい。「war tot」が小さいのは歌としての価値を優先して作った計算された曲。前半から後半にかけて大きくクレッシェンド。

③ [テンポから感じたこと] もの凄いスピードで走っている。ゆったりしている部分。恐怖心が増していく。

④ [リズムから感じたこと] 馬の走る様子。怖さ。リズムから聴いても感じ取れるところが音楽の魅力。

⑤ [明るさ暗さから感じたこと] 魔王のメロディーは明るい→途中から暗いメロディーへ。語り手の最後の音が無くなるのは悲しみや暗いイメージを浮かばせる。

⑥ [歌詞からわかったこと] 最初は魔王に聞こえない声で父に話しかける。魔王の存在。魔王の言っていること。魔王に娘がいること。自分が連れて行かれそうだとすることに気付く。

⑦ [楽譜からわかったこと] さらに激しさを増す。井やりが増える。「お父さん!」が半音ずつ高くなっていく=恐怖心の高まり。「つれてゆく」で音が一番高く急に下がる, 子どもの死を告げている。最後に一瞬止まる効果, 魂が抜かれた瞬間。そのあとゆっくり死んでいく。前奏にも意味があって面白い。

⑧ [歌っている人の表現力から感じたこと] リズムが変わったり, 音量が大きくなったり小さくなったり, 音楽には色々なことがあって驚いた。子どもの声では, 後になるほど声量が増していく。おびき寄せるような小さい声では, いきいきしている。魔王は優しい感じ。語り手の最後, 小さく言って悲しみを出している (より印象づけている)

#### 2.1.3 この活動に対する生徒の感想

グループ単位で鑑賞する方法を生徒はどのように感じたのか, 寄せられた感想を列挙しておく。

一人だと気付かないで終わってしまうことがあるので話し合いみたいにできて楽しかった。少人数だと緊張しないので自分の意見も言えた。何度も聴きたい所を聴き直せてよかった。もうちょっと聴いてみたい, という所をたくさん見つけられた。グループで色々な意見を出し合えてよかった。追求の方法も自分なりに考えて鑑賞の仕方をマスターしていきたい。発見をして, じゃあそれはなぜ?と発見の次に問題を考え出せた。自分が思ったことをどうみんなに伝えるか, どうやって思ったことに近い言葉にするか, いい言葉見つかるか「あっそうか」となるから良かった。自分が思っていたことや自分では気付かなかったことを他の人や他のグループの人は見付けていたから, 人の意見を聞き流したり初めから自分が正しいと決め付けてはいけなかったと思った。自分一人で聴いた時は思いもしなかったことを他の人はそういう見方ができていて凄いなと思った。自分の班とは違う考え方があるのが凄いな。

### 2.1.4 この実践のまとめ

グループの仲間と自由に意見を交換させながら曲に向かわせ、教師が各グループの議論に加わったりワークシートへ朱書きをしたりすることで、生徒の思考を刺激し音楽の諸要素に対する思考の焦点化を促していた。これにより、生徒は情緒的な聴き方に止まることなく、リズム・強弱・高低・テンポなどを拠り所にして作曲者や演奏者の音楽表現上の思いや意図を推理するような聴き方にも取り組めた。しかし、それら音楽の諸要素が持っている働きや、それらが醸し出す雰囲気、それによってもたらされる効果などへの切り込みについては、まだ若干弱いように思われる。

## 2.2 音楽の諸要素を拠り所として「モルダウ」を聴き取らせた実践

### 2.2.1 授業の概要

- ①授業名：「モルダウのイメージの素は何か？考えよう！」グループ鑑賞の実践（中学校1年生対象）
- ②教材：鑑賞曲「モルダウ」、ワークシート（生徒が書き込み、教師が朱を入れて活動を刺激する）
- ③授業者による授業設定の理由

「魔王」では登場人物の心情の変化と音楽の流れを関わらせて鑑賞し、作曲者が細かい所まで気を配って作っていることに驚いた。グループ鑑賞でのメモや眩きを整理すると、生徒は「旋律の抑揚と強弱、旋律の明るさと暗さ、テンポの微妙な変化」に眼を向けて「魔王」を分析しており、音楽の諸要素を結びつけることで深まった聴き方ができることに気が始めていた。そこで「強弱、リズム、テンポ、音の重なり、楽器の重なり」を視点として、もう一步踏み込んだ聴き方と意見交換をさせたい。

#### ④授業者が考えた手立て

担当場面を決めて少人数で繰り返し鑑賞させ、聴き取ったことを議論してワークシートへ書き込ませる。

### 2.2.2 各グループが議論して記録した学習メモ

以下に各グループの学習メモと、ビデオ記録&筆者のメモを照合して記載する。この記述から、生徒は音楽の諸要素の働きや効果を拠り所にしながらかの雰囲気を感じ取り、それを自分の言葉でまとめようとしていたことを読み取って欲しい。

- ①「源流」：テンポ：16分音符は速く流れる音。音の高さ：フルートのスタカートは水が岩にはね返った水しぶき。フルートの音が低くなるのは岩にあたって流れが遅くなるから。重なり：フルートがまとまっていない水、クラリネットが川になった合図。
- ②「主題」：なめらかな感じはヴァイオリンであらわしている。トライアングルで優しさやキラキラ感を表している。音の作りはくり返しなだけで川の流れはいつもとちがう→理由：楽器のひびき方がちがって

後になるにつれて大きくゆったり鳴らしているせい。

- ③「狩猟」：トランペット→狩りの始まり。川の流れを表す弦楽器の音（張りつめた弓）→たえず聞こえてくる。低めの音が軽やか→動物がのびのびと走っている足音。高い音がなめらか→小動物が見ている。音がだんだん小さくなる→動物と人と別れて下流へ。
- ④「農民の婚礼」：楽器：ティンパニが入ると華やかになる。弦とフルートの音がなめらか。強弱：中盤は楽器全体の音が強い→皆、全員が激しく踊る。リズムとテンポ：なめらか。スタカートが時々ついている→人が跳んだりはねたりしている。テンポは変わらない。
- ⑤「夜」：楽器：メイン＝フルート→夜の静かさ。低音楽器→真夜中。強弱：PPP（とても）弱く→夕日が落ちる。＜（クレッシェンド）→朝日がのぼる。
- ⑥「聖ヨハネの急流」第1グループ：楽器：シンバル→水が飛び散る感じ、勢いが増す。打楽器→急流にさしかかる。バイオリン→水しぶきを表現？、水の流れが速い。
- ⑦「聖ヨハネの急流」第2グループ：音の大小・楽器から分かること：緊張感「増す」、たてに激しい、音が大きくなり（打楽器のロール）高くなる（バイオリン・ピッコロetc）。打楽器の音がかすかにとまる、音がここで変わる、ここまでは強く大きな音だけここにくると落ちるようにゆるやかな音になる。低い音でおわりを示す感じになっている（サスペンダーシンバルの後ヴァイオリンの低い音）。
- ⑧「ビジェフラトの丘」：ゆっくりな所→濁っていない水。高低→広大な景色。強弱→活気あふれる平和な町。  
\*教師のコメント：濁ってない水をゆっくりで表せますか？高低によって広大な景色を表せますか？

### 2.2.3 活動後に生徒へ行ったアンケート

この活動の終了後に次のアンケートを行った。

- Q：アンケート内容：「聖ヨハネの急流」の場面を聞いてなぜ皆が同じようなことを感じると感じますか？  
A：生徒の回答を整理して列挙する。

効果音が出てくるから。音の強弱や高低。速さと音の高低。大きな音が鳴っていて激しい楽器が使われている。穏やかな部分から急変して迫力と激しさがあるからだと思う。シンバルの音が水が砕ける音に聞こえたりドラムロールが緊張感を出すという感覚が皆一緒だから。ティンパニの音が細かくなっていてギリギリ感が出ている。遅かったものが急に速くなった。シンバルや大太鼓など印象の強い楽器が多く使われている。滝とか流れの速さ、激しさを演出している楽器（シンバル、トランペット）が他の場面より多く使われている。大きくなったり小さくなったりすることで水が跳ねるように感じさせたり、急に大きな音を出すことで岩にぶつかったことや滝から落ちたような感じにさせる。大きな音が出る楽器（シンバルなど）を



使っているからだと思う。音楽にも迫力があつた=作曲者が皆に「滝がある」と思わせる工夫をしているからだと思う。皆に滝だと分かるように作曲できるのはすごいことだと思った。低い音でジャジャーン, 高い音でピュルッというのをくり返しやっていた。だんだん何かが近付いてくる緊張感という感じがした。「夜」の始まりでは一度小さくしてから始まったけど, いきなり変わったから。打楽器も多く使われている。楽器の強弱などから受ける印象が同じだからだと思う。それぞれに感じる違いはあるけれど, でも「やっぱりこうだよな」と納得できる言葉はみんな同じだと思う。

#### 2.2.4 この実践のまとめ

生徒は、「強弱から～, 音の高低から～, テンポから～, リズムから～」のように様々な角度から曲にアプローチすることを楽しんでた。それに伴って「強弱が〇〇だからここがサビだと思う」「そういえばリズムも△△になってる」「音もだんだん高くなっていく」「ハーモニーもこうなってる」というように音楽的特徴を捉えてそれをイメージへ結び付けるだけでなく, そのどれもが外すことのできない大切な要素であることにも気づき始めていた。しかしこれは本実践単独の成果ではなく, 既にそれ以前から「音楽の諸要素に焦点を絞って合唱曲を聴く」, 「音楽的な特徴を捉えながら歌唱曲を聴く」, さらに「音楽の諸要素に耳を傾けながら合唱する」という活動が積み重ねられてきたことに依るものであろう。それらの活動を継続してきたことで, 生徒の中には音楽と向き合うための「耳」や「聴き方」が養われてきたものと考えられる。よって, ここで行われた鑑賞活動は, 音楽とは離れて国語力に頼って詩的・物語的なイメージを膨らませ表現し合う活動とは明らかに一線を画すものである。

また前回の「魔王の攻略」では音楽の諸要素に気づき, それに耳を傾けた聴き方ができていても, なぜ音楽の諸要素が音楽上の効果を表したり様々な雰囲気を感じ取らせたりするのか, そこへ思考を巡らすレベルにまでは及んでなかった。しかし本実践では, 教師の声かけやワークシートの朱書きによって意図的にそれらへ注目するように導くことで, 表面的な音響現象を聴き取るだけでなく, 音楽の諸要素の組み合わせによって現れる仕組みや効果を考えさせ, それを作曲者はどのように使おうとしたのか推理させていた。

残された課題は次の3点であろう。

- ①各自が自由にイメージしても皆が共通して同じように感じることに気づかせ, それが「音楽の普遍性」であることを理解させること。
- ②オンデマンドな鑑賞スタイルを採ることによって聴取者の要求に従って曲を繰り返し聴き, 音楽の諸要素へ耳を傾けて聴き取ることが可能になった反面, 楽曲全体を通して「まとまりのある一つの作品」として聴

くことが疎かになってしまう危惧を感じたこと。

③ハーモニーを捉えた意見や感想が少なかったこと。これは, それまで和音やハーモニーを聴き取る体験が少なかったことに因るものと思われるが, 現実に中学生の段階では和音や和声を持つ雰囲気の違いをどのくらい感じ取ることができるのか?, これについては次に紹介する中野教諭の実践が示唆を与えてくれる。

### 3 和声を表すキャラクターを感じ取らせる実践

#### 3.1 授業者のねらい

焼津市立和田中学校の中野直幸教諭が, 静岡大学附属島田中学校から転任する直前に中学校1年生を対象にして行った実験的な実践である。

##### ①授業者による授業設定のねらい

生徒は「合唱で大切なのは心を込めること」と言う。その気持ちを大切にしながらも, 精神論だけに終始するのではなく「作曲者が曲の中に織り込んだ音楽の諸要素を正確に表現すれば, 感情を表すことができる」ということを体感させたい。つまり, 演奏者の意欲や感情の高まりに訴えがちな表現活動に対して, 感情は音楽構成要素や表現要素によってもたらされることを理解させるために, 音階における音の意味や和声の性格などに着目させることを企図した。

##### ②授業者が考えた手立て

これまでの実践で生徒が最も苦手としていたハーモニーを取り上げ, まず, 和声の響きから受ける印象を自分なりの言葉で表現し, その印象が多くの人に共通したものであることを認識させる。その上で和声のキャラクターや働きを持っていること, そしてそれが曲の中で効果的に使われていることを理解させたい。

#### 3.2 本実践以前から行われていた「仕込み」

- ①日常的な発声練習として I - IV - V - V7 - I のハーモニートレーニングを授業開始時に実施してきた。
- ②同じく授業の最初の部分を使って「大地讃頌」を階名唱(移動ド唱)によって合唱させてきた(楽譜に階名を記入)。ちなみにパート別に分かれてヨコの音を取る練習は一切行わず, 合唱においてタテの音を取らせて揃える練習のみを積み重ねてきた。

#### 3.3 実際の授業の流れ

筆者がメモした活動の様子とビデオ記録を基にして, 当日の授業の流れを大まかに整理し, 記しておく。

- ①まず, 各自が巻き舌による発声練習を自由に行った後, クラス全体で I - IV - V - V7 - I のハーモニートレーニングを行う。教師は適宜, ピッチをよく聴き取るように注意していた。
- ②階名唱(移動ド)による「大地讃頌」の合唱を行う。教師は, ピッチに気を付けるだけでなく, タテの音やハモリ具合なども聴き取るように頻繁に注意する。

③ワークシートを配布しながら「和声の響きの違いを感じ取る」という本時の課題を説明した。続いて、次に示す4種類の和声（終止形）をピアノで演奏して聴かせ、それぞれの響きから感じ取った印象を自由にイメージさせてワークシートへ書かせた。生徒の様子を見ながら和声進行を繰り返し演奏した。

\*生徒に聴かせた和声進行

- I - V - VI : 偽終止
- IV - II - V : 半終止
- I - VI - II - V - I : 全終止
- IV - I : 変終止（アーメン終止、「大地讃頌」の最後の部分に用いられている）

↓

何度か和声（終止形）をピアノで繰り返し演奏し、しばらく時間をおいてから、教師のリードによってクラス全体で意見交換を行った。教師は、生徒が口にした言葉へ頷いたり表現を変えて問い返したりしながら発言を促し、和声の響きから生徒が感じた印象をホワイトボードへ板書していく。その板書を見たり他の生徒の発言を聞いたりすることで、生徒は再考したり思考を深めたりしていた。このようにクラスで発表し合うことで、和声には何らかの共通のイメージがあることを生徒に気付かせようとしていた。

④ある程度意見がいくつかの方向に収束したところで、教師がプリントを配布してそれぞれの和声（終止形）が一般的に醸し出す印象や意味を説明し、その和声進行の名称を紹介した。それを踏まえて、再度ピアノで演奏し、各自が抱いた印象や感想と照らし合わせながら改めて耳で聴き、それぞれの和声が持っているキャラクターを確認させた。

そして、和声には多くの人を感じる共通のイメージや普遍的な印象があることを認識させ、曲の中で和声進行を効果的に設定することで様々な表情が生まれてくることや、作曲者はその使い分けを工夫し、演奏者もそれを正しく表現すべく努めていることを説明した。加えて、楽曲とは安定した和声と不安定な和声の組み合わせによって構成されていることも説明した。

このように音や音楽が持つ性格や感覚を子ども達へ教えることについて、既成概念の押し付けや大人の感覚の押し売りとして反対する意見もあるのだが、第4章で詳しく記すとおり、筆者は「感性」や「直感」を磨くことと「勘」を鋭くすることは全く別のものであり、より多くの人に理解されて受け入れられる創造性や独自性とは、「知識・技術・経験による99%の裏付けに1%のインスピレーションが加わって成立するもの」という考えに依拠している。よって、奇をてらったり思い付きに頼ったりすることなく、様々な知識・技術・経験の集積という土台に基づいた、より普遍的な独自性や創造性を子ども達へ身に付けさせたいと考える。

⑤和声が生み出す印象を表現するためには各パートが正確な音程で演奏することが大切であることを説明し、次の時間に既習曲の中から様々な和声（終止形）を探し出してみることを予告してから授業を終える。

### 3.4 説明の際に生徒へ配布した資料の概要

教師が生徒へ配布して和声（終止形）の役割やキャラクターの説明の際に用いたプリントから、文字情報のみを抜き出して紹介する。

①和音がつながりあって和声が形成される。和音を単語に例えるなら、和声は文章にあたる。

②Iの和音は「安定和音」であり、I以外のII～VIIの和音は全て「不安定和音」である。安定⇔不安定の交替は音楽の最も本質的な要素をなすもの。

③安定和音から不安定和音へ移り、そしてまた安定和音へ戻る「振り子」のような音運動の一揺れ（一振り）を「カデンツ」と呼ぶ。カデンツは文章のセンテンス（文）にあたるものである。

④音の動き、和声の動き等は、Iの安定和音を巡る揺れの動きに他ならない。揺れの動きにおける安定和音への回帰は、いつも一種の満足感を伴う。

⑤和音の進み方にはルート（道筋）がある。

⑥カデンツを繋いでいけばいくらかでも長い和声を構成し得るが、それでは句読点の無い文章のように掴み所の無いものになってしまう。和声にも句読点の区切りが必要で、その和声の句読点が終止である。

### 3.5 生徒がワークシートに記した内容の整理

#### 3.5.1 「I - V - VI（偽終止）」の印象

① [不安定要素] 14/66 sample, 選択率21%

不安定な感じ。不安定グラグラしてる。やや不安定。不安定。完全に不安定ではないが少しだけ不安定。不安定な感じ。なんか不安定。安定しているものが不安定になった。元気が無くて不安定な感じ。不安定な感じがする。少し不安定な感じ。不安定。安定せず不安定な感じと明るい感じが混ざっている。僅かに不安定。

② [未解決要素] 33/66 sample, 選択率50%

今一落ち着かない。未完成な感じ。きっちり終わりがきいていない。続きがある感じ。煮え切らない。すっきりした音があるのになんかもや～っとしている。満たされていない。もう少しの所で失敗してしまったような。成功しかかってダメだったような。不完全。惜しい。まだ続きそう。完成していない感じ。続きがありそう。今一落ち着きが無い。まとまらない。頂上までいけなかった。すっきりと終わっていない。その後も続くような感じ。中途半端な感じがする。何か終わっていない。まだまだ続くような感じ。最初の2つの和音はきれいだったのに崩れる感じ。暗い雰囲気や中途半端。ちょっとすっきりしない。次の音に繋げるような感じ。あまりはっきりしていない感じ。次に音

が無いと少し変かも。完成までたどり着いていない。失敗した感じ。あまりすっきりしない複雑な感じ。的に外れた感じ。余韻がある。

③ [その他] 19/66 sample, 選択率29%

不安な感じ。悲しい。悲しみが隠れているような感じ。悲しい感じがする(暗さが増)。少し寂しい感じ。悲しみが隠れているような音。暗さが強い。暗さが後から出てくる。一見明るくて楽しそうだけど内面は少し悲しい。明るい中にも暗いものがある感じ。最後の和音が前の部分と不釣り合い。少しずれてる感じ。背伸びした感じ。まとまりがなく崩れた感じ。何か崩れ落ちるような感じ。モヤモヤしている。何かモヤモヤした感じ。「うゃー」。低い音>高い音。

\* [筆者の所見]

不安定な雰囲気と未解決な雰囲気を表す言葉や表現が7割を超えており, その他の感想も「悲しい・寂しい」「暗い」等のメランコリックなもので占められていた。生徒の多くはこの終止形から, すっきりしない, 満たされない雰囲気を感じ取ったと思われる。

### 3.5.2 「IV-II-V (半終止)」の印象

① [未解決要素] 18/54 sample, 選択率33%

きれいな整った和音だけど全体的に中途半端。もう一つの和音を最後の音の次に想像してしまう。繋がっている感じがする。すっきりと終わり切っていない感じがする。もう少し。安定はしていない。安定しているけど少し軽い。あと少しで飛べそうな感じ。すっきりしない。あと一步で頂上。1番(の終止形)より明るくなったけどあまり安定していない。1番と違って納得のいくような感じがするけどまだ何か足りない感じ。違和感はないけどスッキリしない感じ。1番よりも少しだけ安定した感じがあるけどまだ完成という所まではいっていない。次へ繋がりそう, 次の音に行きたがっている感じ。まとまりがある, でもすっきりしない(完成ではない)。まだ少し不安定要素を含んでいる。なんか求めているのと違う感じ。

② [解決要素] 29/54 sample, 選択率54%

すっきりしている。すごくすっきり。解放感。気持ちいい。さわやか。戦争の1シーンを想像したのですが勇ましく散ったような感じ。静かに終わった感じ。希望が見えてきた。光が見えてきた。スッキリとして気持ちのいい感じ。すっきりしている, 少し。1番(の終止形)よりもはっきりしている。少し安定している。何か安定感がうまれてくるように感じた。何かを閃いたようなきれいな音になっている。喜びが感じられる。ほっとする, まとまる, 明るい感じ。突き抜けてしまったような感じ。光が差し込んで上品。明るくて上に上がるイメージ。少し安定した音になっている。明るい感じ。いっきに上がった感じ。安心した感じ。やさしい。落ち着いている。明るい場所へ導かれ

た感じ。盛り上がっている感じ。明るく晴れ晴れした感じ。

③ [その他] 7/54 sample, 回答率13%

低い音と高い音が中和するイメージ。派手ではない。多くの音が混ざっている感じ。落ち着いた感じで派手ではない。物語で言うなら中盤でややゆったりした所の感じ。一緒に下がっていく感じ。独立していた。

\* [筆者の所見]

未解決な雰囲気の影響が約3割あるとともに, 解決した雰囲気を表したのも5割を超えている。生徒はこの終止形から, すっきり解決する雰囲気または未解決の満たされない雰囲気のどちらかを感じ取っていた, もしくはその両方を感じ取っていたと思われる。

### 3.5.3 「I-VI-II-V-I (全終止)」の印象

① [終止要素] 30/73 sample, 選択率41%

終わらせてくれた。2番(半終止)のように中途半端に終わるような感じではなくいい。終わる。明るく終わった感じ。物語のメの部分で使われそう。気持ちよく完結している。すっきりと終わった感じ。流れにのって終わった感じ。すっきりした, 終わったって感じ。終わりそうな感じ。全体がまとまって終わっていく感じ。「最後」って感じ。もうその曲が終わった。曲の終わりみたい。終わったという感じ。はっきり終わっているような感じ。終わった感じ。いったんジャンと終わる。終わりというイメージ。安定している「終わり」って感じ。一番最後みたいな。最後までたどり着いた。ちゃんと終わった感じ。もう終わりだと伝えている。終わりに近付いた感じ。すっきりと最後が終わった感じ。この和音の後は続かないような感じ(最後の和音のように感じた)。終わりって感じ。無理やり終わっている感じがする。安定したまま終わる。

② [安定要素] 7/73 sample, 選択率10%

安定している。安定しているように感じる。安定感がある。とても安定感のある音。完成(まとまった感じ)。安定。空を飛べた感じ, 飛べて安定した感じ。

③ [解決要素] 20/73 sample, 選択率27%

解放感。スッキリ爽やか気持ちいい。後ろの所まで続き整っていききれい。無難。前の和音が不安や苦難表現して最後にその暗闇のトンネルを抜けた感じ。すっきりした感じ。終わり方がすっきりしてキリがいい。解決した。2番(半終止)と同じような感じで何か解決したような感じ。完全。引き締まった感じ。安心。力強い。とても力強いような音。暗い所から最後に明るい所に行くような感じ。雲間から光が見えてきたような快感。なかなか分からなかったことが分かった, すっきりした。曇っていたものが最終的に晴れ晴れとしたものに変わった。明るくなる。雲間から光。



## ④ [主和音としての要素] 8/73 sample, 選択率11%

全体をまとめる役割をしている。まとまった感じ。礼儀がよくて全体の音をまとめている感じがする。今までのものをまとめている感じ。全体をまとめている(まとまりすぎ)。主となる和音という感じ。まとめる。まとまっている感じがある。

## ⑤ [その他] 8/73 sample, 選択率11%

厳かな感じ。おごそか。太い。晴れ。高い音のほうに印象に残りやすい。音と音とが合っていて、とてもきれいな音に聞こえる。太い感じ、ずっしりくる。強い感じ、筋が通っている。

## \* [筆者の所見]

大部分が「終止、安定、解決」を表す言葉で占められている。また「まとめる」や「主となる」のような、統一を意味する「要」としての働きや雰囲気を感じ取った生徒も約1割いた。

## 3.5.4 「IV-I (変終止)」の印象

この終止形は「大地讃頌」の最後の部分にも使われており、アメン終止とも呼ばれている。

## ① [終止要素] 19/81 sample, 選択率23%

最後を飾るようなきれいな和音。曲の最後によくありそう。「はい、おしまい」みたいな感じ。終わる感じ。おしまい。終わった感じがする。重みがある、安定感がある。最後の締めくくり。終わりのイメージ。「おしまいおしまい」な感じ。ゆっくりで終わり。雰囲気を保ったままでフィナーレ。前の和音がラストに近付いている感じで最後にフィニッシュを飾った感じ。「ハッピーエンド」という感じで、いい方向に終わりきった。3番(全終止)と一緒に曲の終わりのよう。穏やかに最後をくくってる感じ。本当の最後のよう感じ。「終わりました」って感じ。終わった感じ。

## ② [安定要素] 7/81 sample, 選択率9%

安定。安定感があっていい。3番(全終止)と同じような音がして安定している。とても安定感のある音。頂上まで上がって落ち着いた感じ。3番と似てる、落ち着いている。明るく暗くもなく落ち着いている感じ。

## ③ [解決要素] 15/81 sample, 選択率19%

すっきり。ほっとする。明るくなってうまくいかなかったものが晴れていく感じ。一気に楽になった感じ。遠くへ飛んで行って旅立った感じ。物語が完結した感じ。一段落付いた感じもする。もやもやが晴れる。自分に言い聞かせている(あえて2回で)。まとまっている。めでたしって感じ。一つの話が明るいフィナーレを迎えているような感じ。全てが解決したような感じ。3番(全終止)と似ているが何かが違う、これもまとまりがある。3番と似ているけれど少し違ったまとめ方をしている。

## ④ [未解決要素] 24/81 sample, 選択率30%

半分終わった感じ。最後のまとまりの前の濁った感じ。また繰り返しそう。完全には終わっていない。まとめる前。楽しみの後に残る悲しみ。楽しい思い出の後の苦しい思い出。終わりにありそう。「晴れたあ〜」みたいな感じ、ただ少し不安定な気がした。まとめる前の一つの区切りみたい。余韻がある。もう一回繰り返しがありそう。一番最後の一步手前。もう一步で終わり。これで本当に終わりと思える一步前。一番最後か一步手前くらい、まとまっている感じ。リピートしそう。何か物足りない。スッキリしていいんだけど、なんか…。終わっている感じもするけど何かモヤモヤ。まとめる前。繰り返しそう。3番より勢いがある。3番より終わった感じはしない。

## ⑤ [その他] 6/81 sample, 選択率7%

滑らかな優しい和音。深み重みがある。ゆったりした感じ。柔らかな感じがした。ゆとりがある。やさしい感じ。

## ⑥ [曲尾にこの進行を持つ「大地讃頌」の影響と思われるもの] 10/81 sample, 選択率12%

天まで行きそうな感じ。上まで行きそうな感じ。イメージは空の上。大地のようなしっかりした感じ。広大な土地を思い浮かべる。低く安定していて何かの望みを感じさせる。平和な終わり。滑らかで優しい感じをもつ。滑らか、優しい、深み・重みがある。何かの歌の一番最後の所のような感じ。

## \* [筆者の所見]

終止、解決、安定を表す言葉や表現が半数ある反面、未解決な雰囲気の表現も3割近くあった。生徒は解決する雰囲気を感じ取ると同時に、解決し得ない雰囲気も感じていたと思われる。またこれまで継続して「大地讃頌」を歌ってきたためか、「天上」や「大地」に結び付く荘重さを感じ取って表現した生徒も1割いた。

## 3.6 この実践のまとめ

音楽の諸要素の中でも最も聴き取らせることが難しいと言われるハーモニーを取り上げて、和音の繋がり方や組み合わせ方で雰囲気が変わり、そこへキャラクターが生ずることに気付かせ、それを感じ取らせようとしていた。さらに、人それぞれに聴き取り方や感じ方は自由であっても、多くの人が同じような印象や意味を感じるなど、音楽には共通して抱く普遍的なものがあることにも気付かせようとしていた。

音楽の諸要素とは、それを知覚し体得するまでに主に活動体験の絶対量(練習時間、練習量)に影響を受けるものと、主に発達段階に影響を受けるものに区別することができる。ハーモニーに関する知覚力は後者で主に発達段階に影響を受けると言われており、音の重なりを聴き分けたりハーモニーの違いを峻別したりすることは、小学校高学年以降でないといえない。よって

今回, 中学校1年生の段階でハーモニーへ真剣に向き合わせたことは, 時機を得た活動であったと言える。ここでハーモニーと向き合い, その違いを聴き取り, それが醸し出す雰囲気を感じ取る体験をした生徒は, 今後の音楽活動においても表現と鑑賞の分野を超えて自然とそれに耳を傾けるであろう。なぜなら「人は自分が知らないことにはなかなか気付けないが, 知っていることには敏感に反応できる」からである。

加えて, 中学校1年生の段階でハーモニーを聴き分けることができることや, その雰囲気やキャラクターの違いを感じ取ることができることを実証したことから, 資料性の高い実践であったと言える。

#### 4 授業に於ける音楽活動の意義

音楽に関する知識や技術とは活動によってより確かなものとして身に付き, その活動を反復し繰り返すことが音楽経験へと繋がっていく。さらにそれは, 思考プロセスを経た活動と思考判断を伴うことによって, 表面的な楽しさだけを求めた音楽活動と達成感や成就感を伴ってより高いレベルのステージをめざした活動とが明確に区別され, それぞれが求める「楽しさ」の質的な違いも明白になる。極言すれば, 「後に何も残らない一過性の楽しみ」と「先へ繋がる成長の楽しみ」の違いでもあろう。そして, 音楽に対する思いを振り返り自らの考えを整理することを通して「自己理解の力」が身に付き, 他者の意見との比較やすり合わせによって「他者理解の力」も身に付け, それを互いに意見交換をしたり説得し合ったりすることでコミュニケーションの力を育むことも可能になる。

ところでmusicの語源であるmusikeとは, 人間の知的活動を司る「女神ムーサの技」に由来するもので, もともと知的なものや技術的なものの両方を必要することを意味している。これは「簡単にできた・知った」ことは身に付きにくく, 努力や練習による達成感や成就感を伴って獲得したものは, より確かな知識や技術として積み重なっていくことを表していると言える。つまりmusicとは「音を楽しむ」よりも「音を嗜む」の意味に近く, 「音で楽(こころよい・たやすい)」ではなく「音から刺激を受ける」ことに近い。これを受けて筆者は, 音楽とは音でplayやgameをするものであり, 音を操ってそれを楽しみ, より上のランクをめざして追求し続けることを楽しむものだと考えている。そのためには, 音や音楽の正体や仕組み・仕掛けを知っていて, それを巧みに使いこなせる技術を持っていなければ, より高いレベルで音楽をプレイすることには繋がらない。単なる音の塊や羅列に音楽の意味や価値を付加し感情や情動を呼び起こすためには, これらに関する知識や技術の裏づけが不可欠だからである。

そして, 演奏者は音を音楽に組み立てていくために

自らの思いや意図を持って音楽に臨み, それを具現化するために演奏上の作戦や工夫を言語活動に支えられたコミュニケーション力によって他の演奏者と共有する。鑑賞者も, 演奏者の思いや意図を想像・予想しそれを具現化するための演奏上の工夫や作戦を逆推理することを楽しむ。つまり, より高い芸術性の涵養をめざすかぎり, 優秀な演奏者を育てることとレベルの高い聴取者を育てることは同義であり, 両者は不可分かつ可逆的な関係にあることになる。

よく誤解されるが, 「感性や直感を磨くこと」と「勘を鋭くすること」とは全く異なる次元のものである。より多くの人に理解され受け入れられる創造性や独自性とは, 個性を主張して奇をてらうことや単なる閃き・思い付きなどの偶然性から生まれるものではなく, 「知識・技術・経験による99%の裏付けに1%のインスピレーションが加わって成立するもの」と言われている。さらに「直観力の素は経験と努力」や「練習でできないことは本番でもできない」という言葉に代弁されるとおり, 意識化・無意識下に於ける様々な知識・技術・経験の集積という土台があってこそ, 初めて独りよがりではない普遍的な独自性や創造性が生まれてくる。例えば演奏とは, 単に音符を音へ置き換える作業ではなく, 自分の音楽的表現要求というフィルターを通して楽譜を音楽へと再変換することである。そして鑑賞も漠然と音を耳にしているのではなく, 自分の嗜好に合った音楽表現を求めて自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで, 心の中に情動が沸き起こっている。つまり演奏や聴くという行為そのものが, 既に創造的な活動を行っていることに他ならない。

よって今後は「表現＝演奏する, 鑑賞＝座って聴く」という既存概念や枠組みを超えて, 音楽の諸要素に注目し音の塊や羅列に音楽の意味や価値を付加し感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを探り, 感じ取ることができるような活動が, よりいっそう模索されることを期待している。

#### 引用・参考文献

- \* 新山王政和・中野直幸, 「イメージングを手掛かりに生徒の主体的聴取をめざした『能動型鑑賞授業』の模索」, 愛知教育大学研究報告第56号, 2007
- \* 新山王政和・菅野裕子, 「聴取の意識を『音の羅列から意味のある音の結びつき』へ転換させる能動型鑑賞活動への試み」—「大地讃頌」を発展的な鑑賞教材として自分なりの意味を持たせた聴き方を体験させた実践例—, 愛知教育大学研究報告第57号, 2008
- \* 新山王政和・木村愛・平木順子, 「音楽の諸要素へ耳を傾け, 根拠や理由を付して考え, それを他者と共有する音楽活動」—小学生を対象にしたワールドミュージックと中学生を対象にした合唱活動—, 愛知教育大学研究報告第58号, 2009春発行予定